

“挨 打” 構文からみる “遭受句” の表現機能

— “被 打” との比較を通して —

李菲

sweetlich@a5.keio.jp

キーワード： 中国語 受動文 遭受文 “被 打” “挨 打”

要旨

中国語では、「殴られる」という事態を表すときに、二種類の構文を使って表現することができる。一つは“被 打”という受動文、もう一つは“(人) 挨 打”という「遭受文」である。人間がひどい仕打ちや被害を受けた時、このように受動文だけでなく、「動詞 (V) + 動詞の名詞形 (N)」という形の能動文で表現できるのはなぜか。本稿は、「遭受文」に焦点を当て、受動文と比較することで、その表現機能を明らかにすることを目的とする。まず、“挨 打”は“挨 N(的) 打”という拡張形式をもち、“打”が構文内で名詞化しているという点で、受動文“被 打”と文法的に大きく異なることを論じる。この“打”の名詞化と連動して、“挨 打”は意味の面において単に「殴られる」という具体的な出来事を指す代わりに、「立場の弱い人が立場の強い人にいじめられている」といったイデオロミ的な意味をもつことに注目する。このことから、受動文が行為の対象の状態変化に焦点を置くのに対し、遭受文は主語の指示対象である人間の体験や境遇を語るための構文であることを主張する。

1. はじめに

日本語で「殴られた」と表現する事態を中国語では、次の二種類の構文を使って言い表すことができる。

(1) a. 我 被 打 了。

私 PASS 殴る ASP

「私は殴られた」

b. 我 挨 打 了。

私 受ける 殴り SF

「私は殴られた」

(1) a と (1) b は文成分と語順の似通った二つの文であるが、a の“被 打”は「受身マーカー“被” + 動詞“打”」の組み合わせであり、文全体が受動文となる。一方、b の“挨 打”は「動詞“挨” + 名詞化した“打”」の組み合わせであり、一般的に受動文ではなく、“遭受句”(遭受文) とよ

ばれる¹。「殴られる」という受身的な事態をなぜ二種類の構文によって言い表すことができるのか。受動文 a と遭受文 b との間に意味の違いがあるとすれば、それは何か。

実は、(1) の a と b の構造の面での対立は日本語にも見られる。「殴られた」という意味の (1) とは異なる例であるが、日本語では「いじめられる」という受身的な事態を次の二通りの構文によって言い表すことができる。

- (2) a. 私はいじめられた。
b. 私はいじめに遭った。

(2) a では「いじめる」の受動態が使われているのに対し、(2) b では「いじめる」の名詞形「いじめ」が動詞「遭う」の目的語となっている。(2) a が(1) a に、(2) b が(1) b にそれぞれ対応しているが、受動態の文と動詞の名詞形を用いた文との違いを、意味の観点からどのように説明すればいいのか。

「殴られる」「いじめられる」のような事態が表しているのは、人間が受けたひどい仕打ちである。このような「ひどい目に合う」という事態は受動文を使う以外、「(ある事態)に遭遇する」を意味する動詞を使って表現することができる。日本語の例でいえば、動詞「(～に) 遭う」が次のような名詞を目的語にとることで、人間が受けた様々なひどい仕打ちを表す。

- (3) [遭う]: 詐欺 / 盗難 / 事故 / いじめ / ひったくり + に 遭う

(3) から、「～に遭う」と結合する名詞は具体的な動きではない、そうした動きを構成要素として含むより大きな出来事を概観的にとらえたものが多いことがわかる。このことと関連してか、動詞をルーツにもつ名詞(いじめ、ひったくり)も見られる。本稿で取り上げる動詞“挨”は「遭う」と同様、動詞をルーツにもつ語彙を目的語とすることができる。“挨打”と「いじめに遭う」は対応する受動文をもつ点で共通している。人間があるひどい仕打ちや被害を受けたとき、受動文の代わりに、「動詞(V) + 動詞の名詞形(N)」の能動文を用いる理由は何か。本稿では、中国語の“挨打”に焦点をあて、“挨打”の文における名詞化の現象に注目することで、受動文と異なる遭受文の表現機能について考えてみたい。

2. “挨打”構文について

2.1 “挨打”における“打”の名詞化

日本語の「いじめに遭う」という表現において、「いじめ」が「いじめる」の名詞形であることは形態から確認できるのに対し、形態変化の乏しい中国語の場合、“挨打”において“打”

¹ 范中华 (1991: 311) の定義によれば、遭受文とは「～に遭遇する、～を受ける」という意味を表す動詞が本来動詞である語を目的語にとり、受身的な事態を表す構文を指す。本稿では動詞“挨”が作る“挨打”の例のみを考察対象とするが、“挨”以外に動詞“遭”“受”“蒙”なども遭受文を作っている。

が名詞化していることを形態の面から裏付けることが難しい。しかし、次の“一顿打”“他的打”のように、“挨打”構文はしばしば動作の回数や動作主を表す語をその間に挿入し、“打”は文中で修飾成分を伴った名詞句を作る。

- (4) a. 我 挨 了 一顿 打。
 私 受ける ASP 一回の 殴り
 「私は殴られた」
- b. 我 挨 了 他的 打。
 私 受ける ASP 彼の 殴り
 「私は彼に殴られた」

(4) a を直訳すると、「私は一回の殴りを受けた」となり、(4) b は「私は彼の殴りを受けた」となる。(4) a、(4) b を、それぞれ対応する次の受動文と比較されたい。

- (5) a. 我 被 打 了 一顿。
 私 PASS 殴る ASP 一回
 「私は殴られた」
- b. 我 被 他 打 了。
 私 PASS 彼 殴る SF
 「私は彼に殴られた」

中国語では、動作の量や回数を表す表現は動詞の後に置かれる。(5) a では“一顿”が“打”の後ろに置かれているのはこのためである。一方、“挨 一顿 打”を“*挨 打 一顿”に言い換えることができないことから、この文において“打”が動詞性を失っていることが確認できる。また、動作主に言及する場合、受動文では“被他”のように動作主が“被”の後に置かれるが、“挨打”構文では“他的打”のように、“打”の限定修飾成分となる。吕云生 (2010: 57) ではこうした特徴を“挨 V”構文における V の名詞化の根拠として挙げている²。

“挨打”と“被打”の違いはまた完了を表すアスペクト助詞“了”との共起関係にも現れている。中国語では、動作の実現、完了を表す“了”は動詞の直後に置く。“挨打”の場合、“了”は“挨”の直後にあるため、“挨”が本動詞であることがわかる。(4) a、(4) b における“了”を“打”の後ろに置くことはできない。

² 但し、動作主が挿入成分となる場合、限定修飾のマーカである“的(の)”がなくても文が成り立つ。例えば、“挨 他的 打”のほかに“挨 他 打”という形も存在しており、受動文の“被 他 打”と全く同じ語順となる。語順が同じでも、“挨 他 打”と“被 他 打”はアスペクト助詞、動量詞との共起関係で異なっており、そこから前者における“打”の名詞化を確認できる。

- (6) a. ³我 挨 一顿 打了。
b. ³我 挨 他 的 打了。

一方、“被打”では“被”ではなく“打”が本動詞であるため、(5) a、(5) bのように“了”は“打”の後ろに置かれている。これを“被”の直後に移動させることはできない。

- (7) a. *我 被 了 打 一顿。
b. *我 被 了 他 打。

以上から、“挨打”の文における“打”の名詞化は、“挨 N (的) 打”という拡張形式、及びその拡張形式における“了”の位置から裏付けを得られることがわかった。“挨打”における“打”がすでに動詞としての特徴を失い、名詞化している以上、“挨打”はVVではなく、VN構造としてとらえるべきである。そして、“挨打”の拡張形式である“挨 N (的) 打”もやはりVN構造であるので、被害の事態を表している、受動文を作る“被打”と違って、あくまで「動詞+目的語」の能動文を作っている。被害の意味は主に動詞“挨”がもつ「こうむる、受ける」という語彙的意味によって担われている。これが中国語で遭受文とよばれる構文の特徴といえる。では、受動文と遭受文の違いはどこにあるか。どちらも客観的には「私は彼に殴られた」ことを表しているが、かたや受動文、かたやVN型の述語をもつ通常の能動文である。文法上の違いが意味の違いと連動しているのなら、構造の異なる両構文を意味の面からどのように区別したらいいのか。

2.2 遭受文についての記述

“挨打”と“被打”の文を比較する上で、まず遭受文というものが中国語学の中でどのように捉えられてきたかについて簡単に見ておく必要がある。遭受文とは「こうむる、受ける」といった意味をもつ動詞が目的語と組み合わせることによって、「～の事態に遭った、～というひどい仕打ちを受けた」という受身的な出来事を表す文であるが、本稿で取り上げる動詞“挨”のほかにも、“受”(受ける)“遭”(遭う)などがこのタイプの文を作る。しかし、“挨”が本来動詞である“打”“骂”(叱る)を目的語にとり、“挨打”“挨骂”(叱りを受ける)のような一見VV型のフレーズを形成するのに対し、“受”“遭”は次のように単音節の名詞を目的語にとることが多い。

- (8) a. [受] 受 气 (いじめられる)、受 罪 (難儀する)、受 苦 (つらい思いをする)
b. [遭] 遭 灾 (災難に遭う)、遭 难 (困難に出会う)、遭 报 (報いを受ける)

(王一平 1994: 28)

ここで、“受 气”と“挨 打”を比較してみたい。“受 气”はVN型の構造をなしてはいるが、“气”自体の意味を問うことが難しい点で、分析可能性が低く、一般にイディオムとして認識されている。一方、“挨 打”の“打”は単独で動詞になることができ、分析可能性が高いため、通常イディオムとして見られることはない。なお、両者のこの違いについてはまた次節でふれることにしたい。

また、“受 气”は対応する受動文をもたないという点でも、“挨 打”が作る遭受文と異なる。

- (9) a. 他 在 学校 受 气。
 彼 で 学校 受ける いじめ³
 「彼は学校でいじめられている」
 b. *他 在 学校 被 气。

従って、遭受文とよばれる構文には様々なタイプのもが含まれていることがわかる。王一平 (1994) は、遭受文に使われるいくつかの動詞を意味によって分類し、さらにそれぞれの動詞が目的語としてもつ語彙を品詞別に列挙している。動詞“挨”に関しては、その意味を「～の事態に遭う（“遭受”）、～を耐える、こらえる（“忍受”）」とした上で、次の三種類のものが“挨”の目的語になることができるとしている。

- i + 名詞： 鞭子（ムチ）、棒子（バット） etc.
- ii + 形容詞： 饿（空腹である）、冻（凍える）
- iii + 動詞： 打（打つ）、骂（叱る） etc.

王氏によれば、名詞、形容詞を目的語にとる場合⁴、動詞“挨”“受”などがもつ「何かをこうむる」という語彙の意味がはっきりしており、文全体が「主体が何をこうむったか、何に遭遇したか」を表す。この場合、構文は能動文（“主动句”）であるので、受動の意味はなく、“被”の文に置き換えられないという。一方、本来他動詞である語を目的語にとる場合、動詞“挨”“受”の語彙の意味が希薄化しているため、“被 V”への置き換えが可能となり、“挨”は“被”に相当するという。

この記述を実際に“挨”の場合に当てはめると、名詞を目的語にもつ“挨 鞭子”（ムチで殴られる）は能動文となるため、受動の意味はないということになる。しかし、“挨 鞭子”は「(主語の指示対象である人間が) 殴られる」ことを表し、これは「主語に起こる出来事」である点

³ “受 气”における“气”の逐語訳を「いじめ」としたが、これは“受 气”全体の意味に合うように便宜的に付与した意味にすぎず、“气”単独では「いじめ」の意味をもたない。

⁴ 王氏の記述にもあるように、“挨”は確かに、通常は形容詞として用いられる“饿”“冻”を目的語にとることができる（“挨 饿”“挨 冻”）。但し、この場合“挨 打”と同様、“挨 饿”は“挨 一天的 饿”（一日ひもじい思いをした）のように限定修飾成分を挿入することができるため、“饿”“冻”は構文内で名詞化していることがわかる。

で、“挨打”と同様、受身的な事態といえる。王氏は名詞が目的語となる場合を能動的、動詞が目的語となる場合を受身的としているが、i類（“挨鞭子”）とiii類（“挨打”）を区別する意味上の根拠は特になく思われる。本稿では、受動文への置き換えが可能かどうかという観点の代わりに、意味の面から、ともに「主語の指示対象である人間に起こる出来事」を表す“挨鞭子”と“挨打”を受身的な事態とする。

また、王氏の記述から、王氏は明らかにi類（“挨鞭子”）をVN、iii類（“挨打”）をVVとしてとらえているが、2.1節で見たように、“挨打”における“打”はすでに名詞化している。従って、“挨鞭子”も“挨打”もVNとみるべきである。このように、意味と形式の両面において、“挨鞭子”と“挨打”との間に実質的な違いはないことが見てとれる。動詞“挨”が作る遭受文の特徴はまさに、受身的な事態をあえて能動型の文で言い表すという点にあるといえよう。

実は、王氏が名詞性の語彙としているものの中には、“束縛”（束縛）のような動詞にもなれる語彙が含まれているが、“挨打”における“打”の名詞性にはふれずに、あくまで動詞としている。次の二例を比較されたい。aとbの文はどちらも[V+A+N]という構造をもち、“束縛”も“打”も名詞性をもつことがわかる。この点からも、目的語となる語彙を品詞によって分類し、区別することは、構文全体の特徴をとらえる上で必ずしも有効ではないことが見てとれよう。本来の品詞が何であれ、遭受文という構文内では名詞化するという点は、この構文の重要な特徴といえる。

(10) a. 想像力 和 创造力 受到 很大 束縛。

想像力 と 創造力 受ける 大きな 束縛

「想像力と創造力は大きく制限された」(王一平 1994)

b. 他 挨 了 不少 打。

彼 受ける ASP たくさんの 殴り

「彼はよく殴られていた」

王氏の記述の問題点はさておき、その背景として、“被V”が作る受動文を基準に遭受文をとらえているということが見えてくる。受動文のマーカである“被”は“挨”と同様、本来「こうむる」という語彙の意味をもつ動詞であった。“被”と“挨”の意味が類似しているのならば、文法化の観点から、“挨”が作る遭受文を準受動文としてとらえやすい。特に、動詞が目的語となるとき、両者は互いに置き換えられるため、遭受文を受動文へ文法化していく途中段階の構文として位置づけることは十分に考えうる。しかし、受動文を基準にして、遭受文に使われる動詞及び構文全体の文法化の度合いだけを問題にしても、なぜ「殴られた」といった受身の事態が遭受文という能動文の形で表現できるのかが見えてこない⁵。

⁵ 本稿では“挨打”のみを取り上げるが、“挨鞭子”（ムチ）のような、人を殴るための道具を表す名詞を目的語にとる、いわばより「何かをこうむった」という語彙の意味の強いフレーズに関しても同様のことがいえ

なお、王氏の記述ではふれられていないが、“挨打”の文であれば常に“被打”の文に置き換えられるというわけではない。例えば、次のように主語が人間ではなく、体の部位を表す場合“挨打”の文は成立しない。

(11) a. 我 的 脑袋 被 打 了。

私 の 頭 PASS 毆る SF

「私の頭が殴られた」

b. *我 的 脑袋 挨 打了。

(11) b が成立しないのは、“挨”による遭受文は通常人間のみを主語とし、“被”による受動文のように無生物を主語とすることができないためである。このことから、“挨”による遭受文が表す受身的な事態とは、「人間に起こる出来事」である。よって、置き換えは可能であっても、“挨打”と“被打”は必ずしも全く同じ意味を表してはいない。

以上の問題に対し、本稿では文法化の観点ではなく、共時的な観点から、遭受文と受動文の意味機能を比較してみたい。遭受文の特徴は能動文の形で受身的な事態を表すことにある。そして、能動文は「主体が何かをスル」ことを述べるための文である以上、受動文にはない「主体性」をもつ。では、遭受文が表す「人間が何かに遭遇した、何かを受けた」という受身的な事態において、主体性がどこに現れているのか。次節では、“挨打”も“受气”などと同様、イディオム的である点に注目し、“挨打”や拡張形式“挨 N(的) 打”の文がしばしば主体の体験や経験を述べていることをヒントに、遭受文における主体性をとらえてみたい。

3. 主体の経験を語る“挨打”

3.1 “受气”の例

2 節では“挨”のほかに、動詞“受”などが述語となる構文も遭受文に含まれていることを述べた。(8) で挙げた“受”“遭”の用例は王一平 (1994) から抜粋したものであるが、これだけでは“受”“遭”からなるフレーズを列挙したにすぎず、こうした語彙が作る文は形式と意味の面でどのような特徴が見られるのかがまだ見えてこない。そこで、よりイディオム性の高い“受气”（いじめられる）を例に、その構文について見ておく。“挨打”が“挨 N(的) 打”という拡張形式をもつように、“受气”も“受 N(的) 气”に拡張できる。“气”の修飾成分である N には人物や、「一生涯」のような長い時間を意味する語彙が現れやすい。

(12) a. 他 有 个 小姨太太, 受 大婆儿 的 气, 跳 月牙河 死 啦。

彼 ある CLF 妾 受ける 正妻 の いじめ 飛ぶ 月牙河 死ぬ SF

「彼には一人の妾がいたが、正妻のいじめに遭い、月牙河に飛び込んで死んだのだ」(CCL)

る。なぜ「ムチ・バットで打たれる」「ビンタされる」のような受身の事態が、VO 構造で言い表されるのかについても考える必要がある。

b. 可 我 又 不 愿 眼 看 着 你 窝 窝 囊 囊 地
しかし 私 また したくない 座視する ASP あなた 意気地がなく
受 一 輩 子 气。

受ける 一生 いじめ

「しかしあなたが抵抗もせずに、一生虐げられるままにいるだなんて、とてもほっとけない」(CCL)

この二つの文から、“受 气”の文では「いじめ」をもたらした人、及びいじめられる期間が“气”の修飾成分という形で言い表されていることがわかる。これは“受 气”が作る遭受文の形式上の特徴といえる。意味の面では、“受 气”の文が表している出来事は単発的な一回かぎりの「いじめ」ではなく、むしろ人生を特徴づけられるほどの、長期にわたる慣習化した「いじめ」を指す。実際の構文に見られるこの意味特徴は“受 气”を語彙のレベルだけで考察しても得られるものではない。つまり、一回のみいじめに遭っても“受 气”ではない。より正確には、“受 气”(“受 N(的) 气”)は「しばしばいじめに遭っている、虐げられている」という慣習化した出来事を表している。この「読み」はしかし、“受 气”を字面で解釈しても得られるものではない。

“受 N(的) 气”に対し、“受 气”が修飾成分を導入せずにそのまま述語となる場合、「いじめを受けている」という出来事を表す代わりに、形容詞化し、「立場の上の人に逆らえない、我慢が多い」といったつらい立場、状況を表す。

(13) 做 女 强 人 的 秘 书 是 不 是 很 辛 苦、 很 受 气?

する 女性実力者 の 秘書 か否か とても 苦勞が多い とても いじめられる

「女性実力者の秘書という仕事は苦勞が多く、我慢も多いですね」(CCL)

“受 气”が形容詞として用いられていることは、直前の副詞“很”の存在や形容詞句“很辛苦”との等位接続から見てとれる。ここでは「秘書を担当すること」が主語となっているため、“很受气”は秘書という仕事の属性を表している。属性としての読みは、“受 气”の経験者を捨象することでなされる。つまり、本来は“受 气”の事態には必ず経験者が存在するが、それにふれないことで、「一般的に、誰でも、秘書の仕事をするといじめられやすい」というより一般性の高い意味が成り立つ。

(12)、(13)の例から、“受”が作る遭受文は単に受身的な事態を言い表しているだけではないということが見てとれる。(12)は個人の経験や境遇として述べられており、(13)は仕事の大変さを伝えている。したがって、度重なる様々な苦難、被害を受け手の境遇や経験として述べるのが、遭受文という構文の表現機能といえる。そして、受動文にはない、遭受文の「主体性」がまさにこの表現機能に現れているのではないか。次節では、このことを念頭に“挨 打”の文について考察してみたい。

3.2 イディオムとしての“挨打”

“挨打”は構成素“挨”(受ける)と“打”(なぐり)の意味がともにフレーズ全体の意味に反映されている点で“受气”よりも分析可能性が高い。そのためか、“挨”が作る“挨打”“挨骂”などのフレーズをイディオムとして扱う研究は少なく、“被”構文との比較で論じられることが多い。中国語では、“受气”のような拡張形式(“受 N(的) 气”)をもつ述語を「離合詞」とよぶが、“挨打”などを一般的な離合詞と区別する文献も見られる(孫徳金 2002: 370)。

“受气”が一語として扱われやすいのに対し、同じ構造をしていても、“挨打”における“打”は本来動詞であるため、構文として解釈されやすい。しかし、分析可能性が高いものの、“挨打”も実は“受气”と同様、単に「殴られる」という具体的な、受動の出来事を指しているわけではない。「立場の弱い人が立場の強い人にいじめられている、虐げられている」というより限定的で、イディオム的な意味をもつ。意味が似通った“挨打”と“受气”はしばしば並立し、一語のように用いられる。

- (14) 旧社会， 咱们 忍受 饥饿， 挨打 受气， 在 火坑里
 封建社会 私たち 耐える 飢餓 殴られる いじめられる で 生き地獄
 过 日月。
 過ごす 日々
 「昔の封建社会では、我々は飢えに耐え、虐げられ、生き地獄の中で日々を過ごしていた」
 (CCL)

- (15) 王家 的 媳妇 真 可怜， 挨打 受气 好几 年。
 王家 の 嫁 本当に 可哀そう 殴られる いじめられる 多くの 年
 「王家の嫁は本当にかわいそうだ。王家で何年もいじめられていたのだ」(CCL)

具体的な出来事に言及しているわけではなく、それ以上の、イディオムとしての意味があるからこそ、“挨打”は“受气”と結合し、「立場が低く、ひどい目に遭わされている」といった状態を示す新たな語彙を作ることができる。従って、“挨打”にも「隠れた」イディオム性があり、“打”が名詞化している以上、もはや具体的な「殴る」という動作を表してはいない。その代り、より慣習化、あるいは常態化した一般的な行為を指す。つまり、イディオム的な意味の産出と“打”の名詞化は緊密に結びついているのである。

次は拡張形式“挨一顿打”の文であるが、動量詞“一顿”(ひとしきりの、まとまった一回の)があるため、「殴られた」という具体的な出来事を表す。それでも、文脈から「すべきことをせず、罰として親や上の人にこっ酷く叩かれた」というニュアンスが含意されていることがわかる。

(16) 他 不肯 _____ 跪下, 结果 挨 了 一顿 打。

彼 ~しようとしなない 跪く, それで 受ける ASP 一回の 殴り
「彼は跪こうとしなかったので、こっ酷く叩かれた」(CCL)

(17) 水兴 的 孩子 不 好好 _____ 学习, 挨 了 一顿 打。

水興 の 子供 NEG まじめに 勉強する 受ける ASP 一回の 殴り
「水興の子供はまじめに勉強しないので、こっ酷く叩かれた」(CCL)

下線部は体罰の原因を示している。(16) (17) のような、「しつけとしての体罰を受けた」という状況では、受動文が通常使われない。文法的に問題があるからではなく、受動文では「しつけとしての体罰」の意味がなくなるためである。例えば、(17) では子供を叩いた動作主は明示されていないが、文全体から自ずと「親」であることが見てとれる。この場合、例えば後半を受動文に変えると、「しつけ」の解釈が成り立たなくなる。「子供は誰か全く関係のない人に殴られた」という意味になり、その分前半の文とのつながりが弱くなる。

(18) ²水兴 的 孩子 不 好好 学习, 被 打 了 一顿。

(水興の子供はまじめに勉強しない、こっ酷く殴られた)

“挨打 受气”にせよ、“挨 了 一顿打”にせよ、いずれも“受 气”の場合と同様、「主体の境遇や経験」を語るための文であるといえる。(14) (15) はそれぞれ、「封建社会に生まれた人々」「人の家に嫁いだ嫁」の悲しい運命、境遇を伝えており、(16) (17) は「彼」と「子供」のしつけ体験について紹介している。つまり、“受 气”の文で明らかになった遭受文の表現機能が“挨打”の場合にも当てはまることがわかる。“受 气”と“挨 打”は分析可能性の高さが異なるが、イディオム性を持ち、人の境遇や経験に焦点を置く点で共通している。次は表現機能の観点から、遭受文と受動文の違いを明確にしたい。

3.3 “被打”との比較

周知の通り、中国語の受動文は対象が受けた状態変化に目を向ける表現である(木村 1992: 12)。従って、“被打”の文は単に対象が殴られたことを伝えているのではなく、殴られた後にどのような傷を負ったのか、といった変化に焦点を置いている。そのため、“被打得满头是血”(殴られて頭が血だらけになる)や“被打伤了”(殴られて傷を負った)のように、“被打”の直後にさらに結果表現が来ることが多い。結果表現のない“被打了”(殴られた)の場合でも、「殴られた」という事実への言及によって間接的に受け手の身体の様子を伝えているのである。このことは、“被打了”は「どうも～、見るからに～、明らかに～」といった意味をもつ副詞と一緒に用いられやすい点からも見てとれる。

(19) 两个 女人, 显然 被 打 了。

二人の 女, 明らかに PASS 殴られる SF
「明らかに二人の女は殴られたようだ」(CCL)

(19) の副詞“显然”から、発話者が相手の身体の変化に目を向けていることがわかる。出来事を受け手の角度からとらえている点は“挨打”の文と共通しているが、人間の「境遇や体験」を語っているわけではなく、あくまで「状態変化」の方に注目していることは両者の決定的な違いである。「見た目」に目を向ける“被打”は次の(20)のように、有生物としての人間だけでなく、変化が現れている部位そのものも主語とすることができる。

(20) 肩上 和 头部 都 被 打 了。

肩 と 頭部 みな PASS 殴られる SF
「肩と頭も殴られたようだ」(CCL)

これに対し、“挨打”の文は「主体」となりえる生物のみを主語とし（主に人間）、“被打”と違い、変化が生じる部位である体の一部を主語とすることができない。

(21) *肩上 和 头部 都 挨打了。

(肩と頭も殴られている)

「境遇や経験」をもち、さらにそれを語られるのに値するのは通常人間のみである。つまり、直接殴られたのは肩と頭であっても、“挨打”を経験したのは身体の方ではなく、主体としての人間である。一方、主語が有生性をもつものでなければならないという制限は“被打”の文には見られない。両構文が有生性の面で見せるこのような違いはすでに呂云生 (2010) によって指摘されているが、なぜこのような違いが見られるのかについての解釈はまだなされていない。以上の考察から、これは両構文の異なる表現機能と関係していることが見てとれよう。状態変化を描くのなら有生のものでも無生のものでもよいが、体験や経験、または境遇を問題にできるのはほとんど人間の場合だけである⁶。

受動文にはない、遭受文の「主体性」とはまさにこうした点に現れている。たとえ受身的な出来事であっても、それを人間の体験、経験または境遇としてとらえ、語ることができる。従って、遭受文において人間は出来事を経験する主体である。遭受文が能動文の形をとっているのはこのためである。一般的に、次のような一人の人間に起こった境遇の変化を語るような場面では、受動文 (22) b が使われない。

⁶ “受气”が形容詞化し、人間の経験・境遇だけでなく、(11)のように「～の仕事」を主語とし、職業の属性を表す用例が見られる。これに対し、“挨打”は未だ形容詞化した例が見られず、職業を主語とすることができない。なお、遭受文を形成する述語フレーズの中で、どのくらいのものが形容詞化し、経験・境遇以外に仕事や置かれている立場の一般的な属性を表せるのかについては、また別稿で論じることにした。

- (22) a. 我 乍一上学的时候, 净 挨打, 过 了 一 年 多,
私 学校に入っただけの頃 よく 殴られる 過ぎる ASP 一年 ちょっと
「入学した当初はよく殴られていたが、一年が過ぎると」
不但 不 挨打 了, 老师 还 很 器重 我的。
だけでなく NEG 殴られる SF 先生 また とても 重視する 私 SF
「殴られなくなっただけでなく、先生にも気にかけてもらえるようになった」(CCL)
- b. 我乍一上学的时候,[?]净 被打, 过了一年多,[?]不但不 被打 了, 老师还很器重我的。

また、受身的な事態が人間の体験や境遇として認識されるためには、ある程度具象性を捨象した、時間的にまとまりをなす出来事でなければならない。頭部に一撃を受けた、身体を一回だけ蹴られたという一個一個の動作は、受動文では言い表せるが、“挨 打”の文は逆に使われにくい。遭受文における動詞の名詞化はこのことと密接に関わっているように思われる。以上で明らかになった、“挨 打”と“被 打”の違いをふまえて考えると、日本語の「いじめに遭う」と「いじめられる」の違いも見えてくるのではないか。能動態の「いじめに遭う」が遭受文“挨 打”に相当するものならば、いじめられるという出来事を人の境遇や体験として語る。一方受動文“被 打”に相当する「いじめられる」は一回、一回の行為に限定した表現と考えられる。この違いの一つの現れとして、時間副詞との共起の面で「いじめに遭う」の方がより制限されている点を挙げるができる。

- (23) a. 太郎は今朝いじめられた。
b. [?]太郎は今朝いじめに遭った。

また、次の例のように、人の一生、運命を総括するとき、受動文よりも能動態の「いじめに遭う」の方が選ばれやすい。受身的事態を能動文で表すことによって、主体の体験を語り、さらに経験する主体に対し一種の特徴づけを行っているのである。次の例は中国語の(12)の例と同様、下線部からすでに、主人公の運命の悲惨さが十分に伝わってくる。

- (24) 両親はともに社会のリーダーとして活躍し、しかも容姿端麗とあって、周囲の愛情に包まれて育った。かたや貧しい家に生まれ、数々のいじめに遭う。対照的な運命を背負った、同い年の女性の生涯をたどる。(産経新聞 2006 年 1 月 4 日)

4. おわりに

本稿では、「殴られる」に対応する二つの表現である、“挨 打”と“被 打”を取り上げ、比較を通して、受動文とは異なる、遭受文の表現機能を明らかにした。遭受文を作る“挨 打”、“挨 N(的) 打”はいずれも「殴る」という動作そのものに言及しているわけではなく、「立場や力関係において上位に立つ者から虐げられている、いじめられている」という慣習化した出来

事を表している。受動文の“被打”は「殴られる」という出来事を状態変化の面からとらえるのに対し、遭受文の“挨打”は受け手を主体に立て、それを受け手の経験として述べる。よって、中国語の遭受文の表現機能は主体である人間の経験を述べることにあるといえよう⁷。

本稿は文のレベルで、このイディオム性を遭受文という構文の表現機能と結びつけているが、語彙レベルで“挨打”を単に定型化したイディオムとしてとらえ、あえて遭受文というものを設定しないという選択肢もあるだろう。しかし、“挨打”と文法的にも、意味的にも類似したVN型の語彙がほかにもたくさん見られるため、共通点を見出すという点では、これらの文をまとめて一つの構文と見るべきであろう。今後は他の例も取り上げ、語彙と構文の両方の観点から引き続き遭受文について考察していきたい。

略語一覧

ASP	aspect
CLF	classifier
N	noun
NEG	negative
PASS	passive
SF	sentence final particle
V	verb

参考文献

- 木村英樹 (1992) 「BEI 受身文の意味と構造」『中国語』389: 10–15.
- 范中华 (1991) 「论遭受类动词及遭受句」『社会科学战线』2: 311–339.
- 吕云生 (2010) 「动词的语义结构对句子结构的制约作用—“挨”字句及动词“挨”的语义结构分析」『汉语学习』6: 51–58.
- 孙德金 (2002) 「现代汉语“V + Dw + (的) + O”格式的句法语义研究」陆俭明主编『面临新世纪挑战的现代汉语语法研究：'98 现代汉语语法学国际学术会议论文集』364–379. 济南: 山东教育出版社.
- 王一平 (1994) 「从遭受类动词所带宾语的情况看遭受类动词的特点」『语文研究』4: 28–34.

引用出典

《CCL 语料库》(http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/). 北京大学中国语言学研究中心。

⁷ ここでいう「経験」は、「殴られる」「いじめられる」のような出来事に限られる。日本語における、「太郎が花子に財布を盗まれた」「太郎は花子に足を踏まれた」といった間接受身の文では、行為の直接の受け手(財布、足)の代わりに、その「所有者」である人間(太郎)を主語に立てることで、出来事全体を人間の経験として述べるができるが、中国語の遭受文にはこのような用法が見られない。この違いは日中両言語において、「経験」としてとらえる事象に差異が存在することを示唆しているように思われる。

The Function of Chinese Suffering-Meaning-Sentence *ai da* : From the Viewpoint of Comparison with *bei* Passive

Li Fei

sweetlich@a5.keio.jp

Keywords: Chinese, passive, suffering-meaning-sentence, *bei da*, *ai da* construction

Abstract

This paper is intended to provide a new perspective on the Chinese construction involving *ai da* (挨打), paying particular attention to the role played by this separable VO structure. This construction, typically used to express the subject getting beaten by someone else, has primarily been regarded as comparable to the *bei* passive (*bei da*). Although *ai da* and *bei da* have a lot in common both grammatically and semantically, they differ in that *ai da* construction is active in voice. It is argued that while the *bei* passive focuses on the change of state in the patient, the *ai da* construction, which features a nominalized verb, portrays the designated event as something that the subject experiences.

(リ・フェイ 慶應義塾大学非常勤講師)